論文の内容の要旨

氏名：桶　田　由　衣
博士の専攻分野の名称：博士（文学）
論文題名：受難、連帯、再生―*A Mask* における Sabrina と Chastity―

本学位請求論文執筆の目的は、John Milton (1608-74) の仮面劇 *A Mask* (1634) において、女性登場人物で主人公 the Lady と Severn 川のニンフ Sabrina の徳を称えつつ、Christ の範例的存在として描いていることを検証し、特に“chastity”を象徴する Sabrina に、*A Mask* のテーマが収斂していくことについて、明らかにすることである。

当時の仮面劇のテーマとして、“the triumph of Virtue over Vice”が根本にあり、*A Mask* もその流れを汲んでいる。本作品における“virtue”は“chastity”である。本作品のテーマが“chastity”である理由として、歴史的背景が大きく関わっている。本作品は Bridgewater 伯 John Egerton の Wales 総督就任を祝うために創作された。その一方で John Egerton の義理の兄弟である Castlehaven 伯が性的スキャンダルを起こし、処刑された。そのため、本作品は Bridgewater 伯一家の名声を回復するために創作されたと考えられる。弟たちとはぐれた the Lady は、肉欲に耽る魔神 Comus の森でさまよう中で、“faith”、“hope”、“chastity”に呼びかけ、自らの身を守るために守護天使を派遣するよう呼びかける。本来この三つは、“And now abideth faith, hope, charity, these three; but the greatest of these *is* charity.” (1 Cor. 13.13) という聖書の一節を想起させるものだが、本作品においては、最も重要な徳“charity”が“chastity”に置き換わっている。the Lady は Comus の誘惑を受ける際、“chastity”の力でもって抵抗する。弟たちは Comus を撃退するものの、the Lady は Comus の魔力からは解放されない。そこで、the Attendant Spirit が“chastity”の守護神 Sabrina を呼び出し、the Lady は救出される。

本学位請求論文では、以下の六章に分け検証を行った。第一章では、Milton が 1645 年以前に自身で創作した詩作品をまとめて出版した詩集 *Poems of Mr. John Milton* (1645、以下 *Poems*) に掲載されている作品の配列順に着目した。注目すべき点は *A Mask* が *Poems* の最後に配列されているという点である。*Poems* に収録された作品は、Milton の創作年順に配列されているわけではなく、Milton が意図的に作品を配列したと考えられる。*Poems* に掲載された全 28 作品に注目すると、神や Christ による救済、そして Christ をはじめとした範例的存在、また範例的存在であった人物の死と救世主的存在に再生するテーマが、*A Mask* に集約されていた。特に本作品において、Christ のような徳を備えた範例的存在として the Lady や Sabrina が登場する。

第二章では、*A Mask* の主題、構成について論じた。当時仮面劇は国王 Charles 一世の政策の正当性を示すものとしての役割を担っていた。特に、王妃 Henrietta Maria が信奉していた Neoplatonism に則った、自足固有の力としての“chastity”が、女性登場人物に付与され、Charles 一世の権力を強めるものとして考えられていた。一方 *A Mask* は、Puritan 的要素が多分に含まれた“chastity”がテーマである。また Comus の親子関係と Sabrina の親子関係が対比的に描かれ、さらに the Lady を演じる Alice Egerton が当時の結婚適齢期 15 歳であることから、親子関係、結婚がテーマとして描かれている。また本論は Sabrina に注目するため、Milton 以前の作家達が描いた Sabrina について検証した。多くの作家が Sabrina を描くものの、救世主的要素を備えた Sabrina は、Milton 独自のものであることを指摘した。

第三章では、the Lady と Sabrina が精神的な、血の繋がりのない象徴的な母娘であることを、C. G. Jung (1875-1961) の元型論を用いて検証した。Comus と the Lady は、本作品の親子関係の位置づけで考えれば、共に子どもに当たり、先ず血の繋がりのないものに助力を求める。しかしながら、Comus は the Lady の存在に気付くと、the Lady を介して母親 Circe との繋がりを求める。一方、the Lady は一貫して、血の繋がりのないものへ助力を乞い願う。その結果、Sabrina が施す“baptism”によって、the Lady は救出される。

第四章は、Milton の神学書 *Christian Doctrine* を用いて、“chastity”と、*A Mask* において“chastity”に置き換えられた“charity”の定義について考察し、二つの徳が *A Mask* において、どのように描かれているかについて検証した。“chastity”と“charity”には類似性が見られる。しかしながら、“chastity”が結婚に関する徳であるのに対し、“charity”は広い人間関係における徳で、“chastity”よりも“charity”の方が高次の徳である。本作品において、the Lady は“chastity”を武器に Comus に反駁するものの、完全に Comus の誘惑を退けることができない。一方で Sabrina に、Christ を想起させる救世主的要素が読みとれることから、Sabrina は“charity”の

徳を備えており、the Lady を救出できる。

第五章では、Sabrina が Christ を想起させるような存在であることを検証した。the Lady 救出の過程に着目すると、“haemony”、“chariot”、“baptism”に Christ 的要素が含まれており、それが Sabrina の描写においても重要な関係があった。薬草“haemony”には、Comus 自体を撃退する効果はあるものの、Comus の魔力を解く力がない。そのため Sabrina が必要不可欠な存在となる。また、“haemony”の語源は Christ の受難を思わせるものであり、Sabrina の死もまた Christ の受難を想起させる。一方、Severn 川が“chariot”となり、Sabrina は“chariot”に乗って登場する。“chariot”は、Milton の他の三作品にも登場するが、特に *Paradise Lost* (1667) においては、“chariot”が神から後の Christ となる神のみ子に委譲される。これに対してギリシア・ローマの神々から Sabrina は、川の守護神として Severn 川という“chariot”を委譲される。Sabrina はキリスト教の要素を多分に備えた存在であることから、*A Mask* の構造にはギリシア・ローマ神話的なものからキリスト教的なものへの移行が読み取れる。また、Sabrina は“baptism”によって the Lady を救出するものの、Christ の“baptism”の力には及ばず、Christ による救済が必要となる。

第六章では、“chastity”の概念の変化を、*A Mask* が引用された Virginia Woolf (1882-1941)の小説 *The Voyage Out* (1915)と *A Mask* を比較して検証した。*The Voyage Out* は、Woolf の自叙伝的要素の強い作品であり、Woolf は、作品中の女性主人公 Rachel Vinrace に、自身が過去に受けた男性による抑圧を投影している。Rachel は、恋人 Terence Hewet が読んだ *A Mask* の Sabrina の死と再生に関する一節から男性の暴力性を感じ、命を落とす。しかしながら Rachel は、熱病にうかされる最中に、Sabrina を呼び出す詩歌を思い出し、救いを求めている。Woolf は一見 Milton を否定的にとらえているように思えるが、Sabrina への救いを求める主人公 Rachel を描くことで、Milton から曖昧ながらも、肯定的な影響も受けているのである。また Rachel は未婚で、肉親とも離れたまま命を失うため、*A Mask* とは正反対に終わる。しかしながら、Woolf 自身は結婚し、作家として成功する。また *The Voyage Out* で *A Mask* とは別に引用された *On the Morning of Christ's Nativity* (1629)は、Woolf の父親 Leslie と関連のある作品であった。Woolf は自らの文学の才能を開花するきっかけを与えてくれた父に対する愛情と不安という ambivalence を感じながらも、父親からの影響を受容することができたと考えられる。

Milton は、徳のある女性には賞賛の意を表し、Christ のような範例的存在として Sabrina と the Lady を描いていった。特に、Sabrina については Christ を想起させるような救世主的要素を備えた存在として、女性もまた Christ の持つ徳を備える可能性があることを示したのである。